

# 社会階層と健康(4)

—若年男性の心理的健康に対する婚姻状態の間接効果—

相模女子大学 中西 泰子

## 1 目的

本報告は、若年男性の現在の階層的地位が心理的健康に影響を及ぼすメカニズムを探る。メカニズムの解明に際して、特に、婚姻状態を経由する効果に着目する。婚姻状態が健康に及ぼす影響については、無配偶者は有配偶者に比べて健康状態が悪い傾向にあることが指摘されてきた (Ross1990)。さらに、馬場ら (2003) は、配偶状態および結婚歴そのものが社会経済的地位によって規定されているのではないかというアイデアをもとに、社会経済的地位が結婚に影響を与え、それが心理的健康に影響を与える、というプロセスモデルを設定し、全国の 29~39 歳女性を対象にしたデータを用いて検証を行っている。それに対して本報告では 25~39 歳の若年男性を対象として、馬場らが想定したプロセスモデルを援用して検討を行う。

すなわち、本報告では、若年男性の階層が心理的健康との関連において、婚姻状態による媒介が見られるか否かを検討する。さらに加えて、婚姻状態が心理的健康に及ぼす影響を、健康的な生活習慣が媒介しているか否かについても検討する。健康的な生活習慣は、結婚が健康によい影響を及ぼす理由のひとつとして挙げられている (近藤 2005)。

## 2 方法

「現代社会の階層化の機構理解と格差の制御：社会科学と健康科学の融合」というプロジェクトの一環として行われた「仕事と健康に関する仙台市民調査」(調査主体：東北学院大学「仕事と健康研究会」)のデータを用いる。調査は、2012年11月~2013年1月にかけて実施された。仙台市の各区の選挙人名簿から、25~39歳男女5,000サンプルを抽出し、郵送調査を行い、1,405名(有効回収率29%)の回答を得た。なお、本報告では、このうち男性票のみを用いて分析を行う。

従属変数となる心理的健康は、精神健康尺度K6 (Kessler et al, 2002、Furukawa et al, 2008)を用いる。K6は、過去30日間の心理的ストレス(反応) psychological distress を測定するために開発された6項目、5件法の質問票尺度である(川上 2011)。独立変数として、就労状態と個人所得、婚姻状態、健康的な生活習慣を用いる。健康的な生活習慣は、「なるべく野菜を食べるようにしている」「糖分・塩分を摂りすぎないようにしている」という2つの質問項目を用いて把握した。年齢などの基本属性を統制し、従属変数と各独立変数の関連、独立変数間の関連を確認したうえで、共分散構造分析を用いて、若年男性の心理的健康と階層との関連を分析した。

## 3 結果

暫定的な分析の結果としては、若年男性の就労状態や個人所得が心理的健康に及ぼす影響において、婚姻状態が間接効果を有していることが確認された。ただし、健康的な生活習慣は、単独で心理的健康と関連を示していたものの、婚姻状態と心理的健康を結びつける間接効果は見いだせなかった。

## 4 結論

非正規雇用や低所得であることが、とくに男性の結婚行動を抑止する効果を持つことが指摘されてきたが、本報告の分析結果は、そうした関連性が、さらに心理的健康状態の悪化にまでつながっていることを示唆するものであると考える。

【付記】なお、本研究は平成21~25年度文部科学省科学研究費新学術領域研究「現代社会の階層化の機構理解と格差の制御：社会科学と健康科学の融合」(代表：川上憲人東京大学大学院医学系研究科教授)によるものである。